町長ひとりごと ㉘

斉藤 譲

恥かしながら、私は金槌である。生来の臆病に加えて運動神経の鈍さが禍いして、ついこの歳になるまで泳ぎのできない哀れな人間である。今でも時偶、栗山川の流れの中をまるで河童のように泳ぎまわる友達を、浅瀬に踞って羨ましそうに眺めている幼き頃の惨めな自分の姿を思い出すことがある。あの時、もう少し勇気を出して頑張っていたならば、という無念がいまも胸に残る。人生の折り返し点をかなり過ぎたいま、半生をふり返り、これからの人生を考える度に、学生時代に勉強は言うに及ばず、スポーツや音楽、絵画などにも身を入れていたならば、もっと人生に厚みができたのではないか、という悔恨が胸にこみあげてくる。

「後悔先に立たず」とはよく言ったものだ。

▼ところで、私達は青少年の健全な育成を図るため、文化、スポーツの振興計画を進めている。図書館やスポーツ施設の建設はその一環である。また、この建設と併せて、これら施設の効率的な運営や、より民意を反映した事業を展開するため、現在「光町文化・スポーツ振興財団（仮称）」の設立準備も進めている。

豊かな社会は、豊かな心を持つ人間の集まりによってはじめて築かれ実現するものである。そして、その人間の豊かな心は、文化やスポーツの中でより大きく育ち、磨かれるものだと考える。だから町が進める人づくりの要諦も、正にここにあると思っている。

計画を進めてきた白浜地区への複合スポーツ施設や、東陽地区への図書館建設事業も、関係機関や町民の皆さんのご理解のお蔭で、事業着手の運びとなり町制施行四十周年を迎える来年には総て完成する見込となった。完成の暁にはこれらの施設が心豊かで逞しい人材を生み育てる母体となるよう強く願っている。

▼これらの事業の中でも、白浜地区の複合スポーツ施設に、B&G財団の温水プール誘致が決定したことは本当にうれしい。この計画を樹てて以来、多勢の人々から熱い期待が寄せられ、その実現が待たれていた。特に、子供達からは強い要望の声があがっていた。正直なところ、私自身もこれほどの反響があるとは思ってもいなかった。

B&G財団が本格的なプール事業を取り入れたのは昨年からのことであり、全国各地から多数の要望の手が挙がり激戦となった。当町も勿論懸命に誘致活動を展開したのであるが、結果は敢え無く書類審査の段階で落選してしまった。頑張った職員の落胆も大きかったが、私も心中おおいに焦った。期待して私に声をかけてくれた人々の顔が、目にちらついていた。こんな難しいものに飛びつき、町民に約束したことを秘かに悔いたりもした。かといって後へも退けず、多額を要する建設を自前で進めることもできない、進退谷まった状況に追いこまれた。

▼しかし、ここで挫けてしまっては折角の公園も、画龍点睛を欠くことになってしまう。担当者と鳩首協議を重ね、来年こそは頑張ろうと決意を新たにした。

本年度の審査は、昨年の十月から始まった。私達は背水の陣を敷き、担当者はねばり強く運動を進める一方で、知る限りの人々にも側面から力強いご支援をいただいた。その甲斐あって第一次の現地調査が決定した。この時こそ町民の熱意を結集し訴えるチャンスだと判断して、多勢の人々に寒い現地にまで足を運んでいただいたり、会場の設営にも細かい気を配った。これが通じたのか、続いて第二次現地調査となり、前回を上廻る多勢の人々にも参加していただいた。私はかなりの手応えを感じたのであるが、その後入ってくる情報はみな今年は無理だという悲観的なものばかりであった。最後の第三次調査を東京で行なう旨の通知を受けたとき、はじめて胸の中に大きく明かるい灯が点された思いがした。

▼六月八日に東京の笹川記念会館で事業決定書の交付式が行なわれ、担当職員の代表浅野参事と共に出席した。三年前に建設をし今年無償譲渡を受ける二十市町村、今年の事業決定を受ける十二市町村の首長が出席し、笹川良一B&G財団理事長から、一人一人交付書が手渡された。本年度の温水プールは三ヶ所であった。私は光栄にもこれら市町村長を代表して、笹川理事長に謝辞を申し述べる機会を得た。笹川理事長から、「ご丁寧な謝辞で傷み入ります。」という一言と共に手を差し伸べられた。驚くほど柔かな手であった。私は一瞬、今までの苦労が、泡のように頭の中から消えていくような気がした。

本当にご苦労をかけ、ご協力をいただいた皆さんをはじめ担当の職員にも感謝を申しあげたい。「念ずれば花開く」である。